
私、転生者らしいんですが。

妄音ルウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、転生者らしいんですが。

【Nコード】

N3603Z

【作者名】

妄音ルウ

【あらすじ】

なにやら気がつけば良く分らないところにいて、スー　ーゼウスみたいなご老人に「お前は転生者だ」と言われました……言われても、ねえ？　基本的には勢いとノリで書いたプロローグを上げたものなので更新はするかも分りません、多分何話かは頑張ると思います。盛況であればもつとがんばります

プロローグ（前書き）

深夜のテンションによって書き上げられたプロローグです。

ぶっちゃけこれを掲載してどうするのかは自分でもさっぱり分かりませんw

なぜならプロットは愚か主人公のプロフィールだって名前以外は白紙なんですから！

まあできれば生暖かく見守っていただければ良いなと思います。

それでは！

プロローグ

私こと浅間綾は転生者らしい。

いきなり何を言い出しているのだろうと思うものもいるのだろうがそれは仕方が無いと思う、私自身もさっぱり理解していない。

……待つてくれ、そんなに可哀想な者を見るような目で見ないでくれ

いや、事実可哀想な者を見ているのだろうが……自覚はしているが、少しだけ待つてくれ。

弁解させて欲しい、別に気が振れたとか厨二病が発症したとかでは断じてないんだ。

説明するなら……そうだな、少々長い話になるが私の生い立ちから話すことが良いだろう。

私はそれほど裕福でもない、だが決して貧乏でもない普通の家庭に生まれた。そこで私は普通に過ごし普通に学校に入学し普通に卒業して……と何もおかしくない普通の生活を送ってきたのだ。

小さな頃はそれなりに活発で元気に外を走り回っていたらしい、小学校に上がった頃からは記憶に残っているが少々本が好きで普通の小学生だったと記憶している。中学では本の虫と呼ばれるほど本を読み必要なかもわからぬ知識を溜め込みながら部活に精を出しつつこれまた普通に卒業した、高校になってからもこれは変わらず、いたって普通に生活したし卒業後は短大に進学し教員免許を取得して今は新米教師として普通に働いている。

そんな私が、なぜこんな可笑しなことをのたまっているかと言えば……他でもない目の前のご老人の性なのである。

「それで、そろそろ良いかの？」

そう、今こんな風に声をかけてきた白髪に盛大に蓄えた髭、そして古代ギリシャの方々が着ているような白い袈裟けさの様な物を着ているご老人が私は転生して今の生を受けたなどと言う狂言を吐きやがっ

ただ。

「のう、そろそろ現実逃避は十分かの？」

……身も蓋もないことを言われてしまった。

そもそも現実逃避とは自らの身に起こったことが信じられず、受け入れられぬためにそのすべてを否定して別のことを考えることを言うのだ。

つまり私は現実逃避などしていないと言えるだろう。

「はあ…もう何でも良い、ただ聞いていてさえくれれば。先ほど言った通りお主は一度死に、再び転生と言う形で生を受けた転生者じゃ」

「……再三言っているが私はそんな厨二病全開の肩書きは持っていない」

転生者と言えばあれであろう、神のミスやそれに順ずる何かの影響で主人公が死んでお詫びに転生させてやる…みたいな流れがあつて行われるものだろう？

最近読んだweb小説ではそんなことだったのだが、少なくとも私にはそんな記憶ないしここが何かの創作の世界だと言われても困る。

「お主が受け入れがたいのは分る…が、お主が転生者であるのは事実じゃ」

「仮に、仮に私が転生者だでしょうか。なら私は何故今の今までそのことを知らず過ごしてきた？私と言う個人の人格が確立されては前世の私は都合が悪かろう、何故？」

「疑問は最もじゃが、そもそも人間を輪廻転生の環に加えず記憶も姿形も変えずにいきなり世界に放り込むようなこと神であっても不可能じゃよ」

……？なら私は転生者ではないんじゃないのか？たまたま前世の記憶が蘇る機会がきただけとは言えないのか？

「転生とは、転生する者の魂を新たな器に移し変えることじゃ。魂とは普通一度浄化されそれを器に移すのじゃが、それをせずに魂

を入れた器を転生者：そう呼ぶのじゃよ」

「じゃああなたにか？私は前世の私に限りなく近くて遠い存在だと？」

「うむ、その通りじゃ。そして前世のお主が望んだ能力を渡すために今回は呼び出したのじゃよ」

……さて、転生者うんぬんの話はかるうじて理解したと言うことにしておこう。

だが今能力と言っただろうか？言っていないと信じたいのだが、言ってしまったのだろうか？

「能力：って私は今までの生活で不自由したことはさっぱりないの
で必要ない。そもそも私が今住んでいる世界に摩訶不思議な能力が
必要なことなぞあるとは思えん」

確かに、最近に我が校に10歳の少年が教師として赴任してきた
ときは驚いたし学園の中心に存在する巨木には赴任当初驚いたし完
全自立駆動のAI搭載型二足歩行ガイノイドが学校に入学したのを
知ったときは時代も進んだのだと驚いたものだが……所詮その程度
のことだ、どれもこれも特異ではあるがそんなこともあるだろう程
度のものだ。

「その裏にお主達一般人には秘匿された世界が存在してもかの？」

「……なんだって？いやいや、流石にそれは笑えない冗談だ。そこ
まで真剣にシニールなギャグを言ったところで笑えないな」

「常識とは確かに変えがたいものじゃが、事実じゃよ。お主が生き
ている世界には魔法が存在するのじゃ」

魔法、魔法ときた。

私が生活するこの世界に魔法が存在する？ありえない、それこそ
何の冗談だ。もっとうまい冗談が欲しいものだ。

「何故ありえないと言えるのじゃ？」

「そもそも魔法なんてものが存在していたら化学が発展しないだろ
う、何故なら科学なんて非効率的なものよりも有用な技術が存在す
るんだ…使わない方がおかしい」

そうだ、魔法が存在するなら今の科学は遅れているはずだし魔法

を公開した方が多くの恩恵を得られるはずだ。

そう単純な話ではないかもしれないが、少なくともエネルギー問題に関しては随分楽になるんじゃないのか？火や水なんかは魔法でどうにかなりそうだし、あくまで創造の範疇なんだが。

「お主が考えていることも最もじゃが、それでもそれほど世界とは単純にはできていないのじゃよ…それに魔法とは魔力を使用するものじゃからな、適性が無ければ初歩の初歩も扱うことができないのじゃよ」

「そんなの科学だって変わらないだろう、それこそ専門分野に関しては一般人は無知も良いところだ」

「じゃがそれは科学によつて理論が完全に証明されていて学びさえすれば誰でも再現可能じゃからじゃよ、魔法とは神秘…理論や机上の証明だけでは説明できん部分も多く存在する、じゃから秘匿するのじゃよ」

納得は…できないが、理解はできた。

だからと言つて能力を受け取ることには繋がらないのだが。

「何故それほど頑なに断るのじゃ？魔法、本を読むお主なら一度は憧れるじゃろう？」

「読まなくても憧れはするだろうが…詰まるところその能力は重火器と変わらないんだろう？使い方を誤れば、いや誤らなくても人を簡単に殺せるようなものなんじゃないのか？」

「…たしかに、破壊や殺しに特化したものも存在するがの」

「なら、受け取りたくないものだな。俺はそれなりに安全で平和な今の普通な生活が続けば良いと思つているからわざわざ自分から死地へ赴きたいとは思わない」

確かに今の生活は平々凡々としてなんの刺激も無くただ流れているようなものだが、だからと言つてそれを手放してまで刺激あふれるが危険な世界へ行きたいとはさっぱり思わない。

「じゃがな、非常に言い辛いのじゃが…お主が危険な世界に関わるのはほぼ確定しておるんじゃ」

………は？

「前世のお主はストーリーに関わることに決めた、多分来世の自分は拒否するだろうが…とも言うておったがの」

恨むぞ、前世の私

「………ん？今ストーリーと言ったか？では私のいる世界は創作の世界だとも言うのか？」

「ふむ、そうじゃな…認識の違いなのじゃが、説明しようかの。すべての創作とはそれを何らかのきっかけで観測したものが綴る…つまりお主が読んでいる本の世界もどこかに存在し、お主の世界のその本の作者がそれを観測　もちろん無意識にじゃが　したことによつて綴られたものじゃ。よつて正確にはお主の世界は創作の世界ではないが他の世界の者から見れば創作の世界になるのじゃよ」
私が読んだ本たちの世界が実際に存在している？私も同じように観測された世界に属している？………冗談も程ほどにしてくれ

「事実じゃよ、ところでどうするのじゃ？断固として能力の受け取りを拒否するのなら無理に渡したりはせんが」

「前世の私は受け取らなければまずいと思って私にその能力を設定したのだろう？なら、私は不本意ながら前世の私の意志を尊重してやろうじゃないか」

どうせ危険に巻き込まれるのであれば安全に切り抜けられた方が良くに決まっている、ならばこれは受け取っておくべきなのだろう。
前世の私よ………本当に面倒なことをしてくれたものだ。

「ならば能力を授けよう。お主に与えられる能力は5つじゃ」

「5つもとは、随分と太っ腹なのだな」

「なに、こんなもんじゃよ。では説明するとしよう、一つ目は『魔法を象徴化し視認できるようにできる能力』じゃ」

魔法を象徴化し視認できるようにする？それはつまり魔法を解析できる能力つてことでもいいのか？

「うむ、大体そんな感じじゃの。二つ目は『魔力・気等の使用量の最適化及び最小化』じゃな」

使用量の最適化と最小化：魔法なんかの使用時に使うエネルギーロスをほぼ0にできると考えれば良いのか？それとも実力に見合った量に勝手に調整されることで良いのか？

「それは前者じゃな、どんなときでも最も少ない使用量で最大の効力を発揮できるのじゃよ。三つ目に移るとしようかの、三つ目は『状況に最も適した技能を瞬時に選択し使用できる能力』じゃ」

瞬時に選択して使用できる…ね、強制的に身体が勝手にそれを行ってしまうならお断りなんだが使用判断は自分でできるんだろうな？

「もちろんじゃないよ、でなければ無差別に攻撃してしまう可能性がでてしまうじゃろ。四つ目は『多重分割思考能力』、つまり同時に複数のことを考えることができる技能じゃな」

それはなかなか便利そうだな、だが具体的にどれくらいの分割思考が可能なんだ？

「現在は訓練もしていないからの、最大でも3が限界じゃろうが訓練すれば順次増えていくじゃろう。そして五つ目は『空間把握能力』じゃ」

それは随分分りやすいが、能力と言えるほどなのか？

「もちろんじゃないよ、空間把握能力に関しては取得してすぐなら自分を中心に半径50メートルほどを大体把握できるじゃろう。訓練すればこちらも距離が増えていくと思うぞ？」

「……これは随分反則臭いんだが大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃ、問題ない」

その発言が既に大丈夫じゃないのだが

とりあえずは置いておこう。

「それからの、能力ではないのじゃがお主には知識的に魔法を教えるておいてやろう。この後目が覚めればお主の頭の中には魔法や気に関する事柄が入っているはずじゃから確認してみるとよいぞ」

「それは既に六つ目の特典になっていそうなのだが、まあ頂けると言うのなら頂こう」

「では、お主の世界に帰るとよい。なに、身体の心配はせんでよい

ぞっすぐに全快するはずじゃからの」

それはどういふことだ？

……そう言えば私は何故こんなところに来ていたんだっただろうっ？

「ではの」

「あ、待て！もう少しくらい説明を……！」

こうして俺は転生者（？）として生活することが決めたのだっ
た。

プロローグ（後書き）

次回へ続……けたらいいなあ

一日目（前書き）

さて、勢いで書き上げたプロローグで終わらせないため書き上げましたよ第一話

……山も谷も丘も溝もない話になりましたが、仕方がない！

あ、すいません

そんな見捨てないで！

……え、まあですね

こんな感じでゆるくやっていますので暇つぶし程度にお楽しみを

一日目

おはようございます、あさまりよう浅間綾です。

今しがた目が覚めました、目に入るのは見慣れぬ真っ白な天井とベッドを囲むカーテン……って病院のようですね。

もしくは保健室でしょうか？

どちらにしても何故私はそんなところのベッドで寝ているのでしょうか？

どうにも記憶がはつきりしません……覚えているのは白いサンタクロースみたいなご老人との会話

……会話？そう言えばあれはどちらさまだったのでしょうか？まさか神様とか言いませんよね、ありそうですがそんなの認めませんよ断固として

あんなにふざけた人が神様だとか本当に冗談にして欲しい……まあそれは置いといて転生の話でしたよね

あのご老人が言うには私は転生者でなにやらこの世界には魔法なるものが存在するらしいです。

今だ真偽は定かではありませんが頭の中には覚えのない単語や知識があるのを考えるとどうやら本当のようです。

ええ、私、転生者らしいです。

……自分で言っただけ目眩がしました。

なんでしようこのどうしようもない残念さは、とても救いようのない人に出くわした気分です……自分のことですが

「あ、起きましたか？浅間さん」

おお、これは看護師さんお仕事ご苦労様です。

私はいたって健康なのですが何故こんなところで寝ているのでしょうか？

「あ……覚えていらっしやらないんですね、浅間さんは交通事故にあっただけここに運ばれてきたんですよ？相手の完全な前方不注意だっ

たらしいので本当に不幸な事故でしたね……幸い目立った外相も無くて軽いうち身と脳震盪で意識が無かったのでそれで覚えていらっしやらないのかもしれませんがね」

……私、事故にあっていたようです。

これは相手の方にも迷惑をかけてしますね……事故はどれほど歩行者が悪くても運転者に責任が行きますから

まあ今回は私に過失は無いようですが、それでも相手の方も起したくて起したのではないでしょうからキチンと謝罪に来てくれれば許すことにしましょう。

それで看護師さん、私はいつ退院できるのでしょうか？

「一応検査がありますので明後日といったところでしょうか？それまでは安静にしていってくださいね？」

了解しました、安静にしていますよ。

それにしても魔法の話は本当なのでしょうか？少しだけ試してみましようかね、どうせ今日一日は暇なのですから

マルチタスク
多重分割思考の練習もかねてお医者様の質問にでも答えながら魔法の研究でもして見ますか

無駄といえるほど知識は手に入りましたしね。

十

そんな訳で、何とか退院することができました。

結局学校には四日もいくことができなかったなので今日はもう夕方ですが顔を出して生存報告とここ数日の仕事を処理しましょうか。

……おや？あれは、随分見事な着物を着ていらっしやいますか？
- Aの近衛木乃香さんと担任のスプリングフィールド先生ではありませんか
それにしてもスプリングフィールド先生は魔法使いなのですね……

……今空飛んでましたし

はあ……本当に私の頭がおかしくなっただけならよかったです

が、いやそれもよくはありませんがね

まあ彼はいつも何故かあの長い杖を持っていましたし、10歳で教師をやることになるなんて異常なことですから大方魔法の修行か何かでこの学園に来たのでしょうかね

………ん？というところは少なくともこの学園のトップである学園長はそれを知っていることになるのですから魔法使い？

異様に出張が多いですが行き先は毎回明言されない高畑先生も魔法使いでは……？

……私の周りにはどうにもマジカルな方が多いようですね。

それにしても魔法の秘匿は良いのでしょうか？この時間とは言え正面玄関前で下りれば見つかるでしょうに……事実近衛さんに見つかりますし

「木乃香さまー！？どこですかー！」

おや、どうされたんですか？

「はい？あああなたは浅間先生ですね、先日事故にあわれたとか……お体の方は大丈夫ですか？」

ええ御蔭様ですこぶる快調です、ですがなにやら急いでいたようですが良いのですか？

「ああ！そうでした！このあたりで木乃香お嬢様を見かけませんでしたか？」

木乃香お嬢様？ああ、2-Aの近衛木乃香さんですか？それなら先ほど随分と気合の入った着物であちらの路地へ駆けて行きましたか……どうかなさいましたか？

「いえ、少し御用がございました……ありがとうございます」

いえいえ、困ったときはお互い様ですので……それでは

「ええ、ではまた。お嬢様ー！」

大変ですね、頑張っていたきたいものです。

まあ私は本当のことを言ったとは言っていないからだまされた方が悪いのですよ？

……それよりも早く職員室へ行かなければ、仕事はしないと行け

ませんかからね

「ネギ君どこだよ！」

「ネギせんせー！」

「おや？今度は2-Aの皆さんではないですか、どうしたんですか？」

「あ！浅間先生こんにちは！ネギ先生みませんでした！？」

「スプリングフィールド先生なら校舎に入っていくのを見ましたが、その後は分かりませんね」

「学校の中か……！先生ありがとう！みんな行くよ！」

『おー！』

廊下は走らないように……って聞いていませんね、それにしてもスプリングフィールド先生は何をしたのでしょうか？

あんな大人数に探されるなんてそうそうありませんが……勉強での質問という感じもなかったですね

どうなることやら、まあ私は関係ないのですが
さて、気を取り直してお仕事と行きましようか。

一日目（後書き）

次回に続け！

さて、今回はコミックス第二巻後半に収録されていた木乃香のお見合いの話に少しふれました。

ちなみに主人公の口調が違うのは仕様です、かみさまwの前では前世の綾の影響力が増加したので少し乱暴になりましたが実際はこんなもんです

まあまだ不透明な部分が自分自身多いのでこいつがどうなるのかはちょっとわかりませんw

主人公の変貌ぶりは見て行っていただければわかると思うので、イメージと違ったらごめんなさい
それでは！

二日目（前書き）

三話目の投稿となります。

どうも、妄音ルウです。

文章は稚拙ですが結構がんばっていますのでできれば頑張りだけでもみて帰っていただきたいです……

ところで、現代にも「私には前世の記憶があるんです！」なんて電波なことをいう人がたまに居ますけれど

あれって、実はマジな転生者なんだからと思うと途端に転生物の小説が痛々しく見えてきませんか？

……すいません、妄言でした。

では本編をお楽しみください。

二日目

さて、早いもので私こと浅間綾あさまりようが魔法の存在を知ってから数ヶ月魔帆良学園も春休みに突入しました。

とは言え教師である私にはそれほど関係のあることではなく、ただ授業がないだけで仕事はあるのです。

まあ授業がないことで仕事もそれなりに早く終わるので、平常時よりは幾分も楽ではあるのですが。

閑話休題

私はこの春休みを使って魔法についてできるだけ多くのことを知っておきたいわけです。

何せ命に関わることが次々と起こってもおかしくないような世界に足を踏み込んでしまったわけですから、ある程度の実力を身につけなければ危ういことの上ないでしょう。

と、言っても私の頭の中にはあらゆる魔法の知識が入っていますが（入れられた、なんですけどね）知っているのと扱えるのではまた違うもので

つまり誰かに師事して研鑽するのが何よりの近道だと思うのです。そこでこの魔帆良学園に在籍する魔法使いの皆様を調べたところ、また出るわ出るわ……

私たちの日常にこれほど当たり前のように魔法使いとは存在していたのですね

何はともあれ、師事する方を決めないことには何にもなりません。そこで気になったのが、我がクラスに所属するエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんです。

……教師が生徒に師事するのはおかしいと思っていませんか？私も思いますが背に腹は変えられませんが、何より彼女はなんと魔法世界では知らぬ人なしとまで言われる伝説級の賞金首らしいではないですか。

なんでそんな方がこんなところで中学生などやっているのかは気になります……それは何か事情があるのでしよう。

賞金首だとかそんなことは気にしません、だって教師の私からすればサボり癖のある一生徒なのですから

ところで皆さん、何故高畑先生にお願いしないのか気になっているのではないのでしょうか？

それにはキチンと理由があるのですよ？

まあそれほどややこしい理由はないのですがね。

高畑先生はどうやら魔法世界で英雄と呼ばれるほどの実力の持ち主なのだそうです。

多分あの多くの出張は魔法世界での任務なのではないかと思うのですよ。

つまりあの出張の多い高畑先生に教えを請うても効率が悪そうじゃないですか、それに私が魔法を使用することはできれば学園長など主要な魔法使いの方々にはまだ知られたくないのです。

理由はありませんが

そんなわけで、私は今マクダウエルさんの家に来ています。

寮ではなくこんなログハウスに住んでいるのも元賞金首だからなのでしょうが？

「ごめんください、私担任の浅間ですがマクダエルさんはご在宅でしょうか？」

……返事がありませんね

お留守でしょうか？

「はい、マスターに何か御用でしょうか？」

おや、何故かメイド服の絡繰さんが迎えてくれました。

「こんにちは、何故マクダウエルさんの御宅に？」

「私はマスターの従者ですので、浅間先生は何の御用でしょうか？」

ああ、そうでしたと忘れるところでしたよ

「マクダウエルさんに直接お話ししたいのですがよろしいですか？」
できれば内々におきたいのですが

「かしこまりました、では中でお待ちください。マスターを呼んで参ります」

「すみません、お願いします絡繰さん」

それにしてもこれはまた随分とファンシーなお部屋ですね
人形にぬいぐるみ、部屋の感じとあつていても可愛らしいお部屋です。

「何をしにきた、先生？」

「これはマクダウエルさんこんにちは、今回は少しお願いがあつてきたのですよ。」

「授業にでると言つのなら拒否させてもらおう、あんなもの必要な
い」

「いえいえ、授業にも出ていただきたいですがそうじゃないんですよ。今回は少し”魔法”を教えていただきたいくてですね……」

「……なんだと？」

「ですから魔法を……？」

なぜ、私はマクダウエルさんに組み伏せられているのでしょうか？
というかいつの間にか？

「貴様、何が目的だ？ジジイの差し金か？」

ジジイ……学園長のことでしょうか？

ところでやはり学園長は魔法使いなのですね

「いえいえ、違いますよ。これは私の独断……と言つか個人からの
お願いです」

「この学園の魔法先生は全員知っているが貴様はいなかった、なぜ
今まで隠し通せてきた」

それはごもつともでしょうが、私にもいろいろ事情があるんですよ
ねえ

まあ説明しても構わないでしょう。

何せ真実こそが何より虚構のような事柄なんですから……

「説明はしますので、できればこれを解いてほしいのですが……危
害なんて加えられませんよ？」

そもそも理由がありませんからね

私は他の見事をしに来ているのであって、危害を加えようとは微塵も思っていないませんし。

「……ふん、まあいい話してみる」

「ありがとうございます」

では、説明いたしましょう……

教師説明中

「私のやるゲームの設定のほうはまだ作りこまれているな」

一言ではつきり切られました。

まあしょうがないんですがね、こんな話信じられるとも思えませんし

「……だが、でなければ私のところに弟子入りになんて来るわけがないか」

……おや？なぜだか少し芳しい反応が

「ふははは！いいだろう、この私が貴様を鍛えてやる！」

急に壮大な態度になりましたね、でも教えていただけのならなんでもいいのですよ私は

ではよろしくお願ひしますね。

「それで、貴様は何ができるんだ。さっきの話なら何か特典とやらをもらったんだろう？」

なかなか順応の早い方のようです。

それにしても特典ですか？全部で6つほどあるのですが……

教師説明中

「貴様もバグか……」

なにやら落ち込まれてしまったのですが、どうしてでしょう？

まあ確かに私のもらった特典はすごいものばかりですがね、魔力

等使用量の最適化なんていろいろな方々が研究して減らしていくものを無条件にやってのけてしまうんですから

自分のことですがひどいものです。

「まあいい、神なんぞが本当にいたのは驚きだがそれから与えられたものなら納得もできる。ではまず貴様には対価を払ってもらおうか」

対価ですか？私はあなたに贈れるようなもの何もないのですが……なにがいいのでしょうか？

「ふん、何も難しいことじゃない……私の呪いを解け」

呪い……ああ、だからあなたの周りにはなにやらよく分からないものが纏わり付いているんですか

それにしても呪いとはどのような呪いで？

「ぐっ……それは、登校地獄……という呪いだ」

はい？

登校地獄、ですか？

「そつだ、登校地獄だ！これでいいな？！早く解け！」

登校地獄……ああ、不登校の児童を学校へ通わせるための魔法です
すか

何故そんな魔法をかけられているのかは分かりませんが、対価といわれれば仕方ありません。

とりあえず、魔法式アナライズ象徴化

……見えました、魔法を象徴化すると魔方陣のようになると分かっています
つてはいましたが

何故マクダウェルさんを雁字搦めにしているのでしょうか？

「早く解けと言っている！何をしているのだ！」

少し待ってください、なにぶん初めてのことなので少し時間がかかります。

ですが、何故この魔法15年も経過していて尚起動しているのでしょうか？

3年で効力が切れるように設定されているはずなのですが……？

あれ、登校地獄以外にもう1つ魔力封印の魔法？何故そんなものがあるのでしょうか？

ともあれ、早く解いてしまいましょうか。

つまりは魔方陣なんて数式と同じで、式が成り立たぬようにしてしまえば効力もなくなるのですから

効力と拘束時間及び拘束場所を無効に、魔力封印は封印量を0にしてしまえば実質効果はなくなるでしょう。

さて、これでどうでしょうか？

「おお……おお！戻った！戻ったぞ私の魔力が！」

まだ全快とは言えないでしょうがそれも日数が経てば戻ると思いますよ？

それから、その呪いは解呪したのではなく効果を0にして無害な呪いにしただけなので私が技術を研鑽して完全解呪できるようにになりましたらきちんと解きますので、それまでは少々お待ちください
「構わん！いくらでも鍛えてやろう！あはははは！超一流と呼べるまで鍛えてやるから覚悟するがいいさ、あははははははははは……！！」
……ずいぶん悩まされていたんでしょうね、なにやら大変なデモンションになっておられます。

なので、明日からよろしくお願いしますね？

二日目（後書き）

次回に続くといいなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3603z/>

私、転生者らしいんですが。

2012年1月2日06時48分発行